

平成 31(令和元)年度の具体的な学校経営目標・計画

<評価基準> A:目標を上回った B:ほぼ目標どおり C:目標を下回った

岡山県立岡山御津高等学校

学校経営目標	担当	具体的計画	現状及び今年度の達成基準	中間達成状況	評価	最終達成状況	評価	総合
① 学力向上(全体の底上げ上位層の引き上げ)	教務課	○年間5回以上の学習通信を発行し、学習の意義や科目選択および学習と進路に関する意識を醸成する。	○年度末において得点不足による単位不認定科目の延べ数を40科目→30科目に減少させる。	○学習通信をすでに2回発行し、生徒の意識の向上をはかるが、効果については現状では未知数である。	B	○学習通信を5回発行し、生徒の意識の向上を図った。 ○不認定科目の延べ数はデータ不足だが、計画的な学習や見通しを持った授業への意欲的な取組に関する生徒の評価は、60%弱の結果であった。	B	B
	進路指導課	○「高校生のための学びの基礎診断」を活用し、英数国の基礎的内容の徹底指導の繰り返しを行う。 ○上位層の学習集団を育てる。	○GTZの D3ゾーンに属する生徒の割合を6割→5割を切る。 ○大学・短大・看護系上級学校を希望する生徒の学習集団と、それを支援する教員の体制ができています。	○「高校生のための学びの基礎診断」事前学習教材から、基礎・基本の部分を抽出し、GW前や直前など、複数回にわたって取り組ませた。 ○2年次生国公立大学進学希望者を月1回招集し、進路に関する活動を行っている。平日補習に参加するメンバーも定着しつつある。	B	○GTZの D3ゾーンに属する生徒の割合は6割であった ○平日補習の他、SHR 前や放課後に個別指導を受ける生徒が増加した。模試後も面談を行い、進路決定までの学習の見通しを立てるなど、進学希望者の意識の高まりを実感できるようになった。	B	
② クラスづくり、集団づくりの推進	生徒育成課	○行事において目標や評価を明示し、生徒の達成感を獲得させる。 ○集団のなかで、主体的に行動する場面を増やす。	○与えられた役割を果たせば良い、という姿勢があるため、自分の所属する集団のために行動できたか、ということを目指して振り返りを行う。	○各行事の目標設定、振り返りを行っているが、目に見える効果を得ているかどうかは分かりにくいところもある。 ○今後は、もう少し仕掛けが必要だと感じる。	B	○各行事後に振り返りを行い、その取組は保護者にも広く理解が得られている。 ○クラスや行事で、生徒が企画する機会を増やしたこともあり、他者と協働する意識は74%に高まった。	B	B
	研修部門	○毎月実施するOJTチームによる研修会、および年3回実施する拡大OJTの授業改革の取組を通して、望ましい生徒集団づくりに関する理解を深め、実践的態度を身につける。	○OJTチーム研修および拡大OJTによる研修の事後アンケートにおいて、理解が深まったと答える教員が90%以上となる。(クラスづくり、集団づくりの研修に関するアンケートは新設)	○若手教員中心のOJTチーム研修は5/22に実施した。拡大OJTによる授業研修会は5/23及び7/29に実施した。集団作りについてのアンケートは肯定的評価が100%であった。	B	○若手教員中心のOJTチーム研修は3回実施した。 ○拡大OJTによる研修の事後アンケートにおいて、100%の教員が理解が深まったと回答した。次年度以降のさらなる実践に期待していきたい。	B	
	1年次	○良い行動については、機会をとらえて称賛することで、生徒の自己肯定感を高める。 ○集団行動とグループ活動を通し、集団としての和を育てる。	○集団を意識して行動しようとする意識が見られる。 ○所属感や規律意識が育ち、集団行動をすることができる。	○1日研修では代表生徒が中心となってレクリエーション大会を企画し実施した。集団行動についてはオリエンテーションや年次集会で機会を捉えて話をしている。産業社会と人間の授業や年次集会などは時間や集団を意識して行動できつつある。いろいろな場面で、自分たちで主体的に判断して行動していく力を今後はつけていきたい。	B	○職場・上級学校訪問やレクリエーション大会では、集団や仲間・グループを意識して行動することができた。 ○教員の指示の下では、集団やルールを意識して行動することはできる。自分からTPOを判断し、主体的に行動していくことが、今後の課題である。	B	
	2年次	○ルネス学や修学旅行などのグループ活動を通して、他者と協働できる集団を育てる。 ○ハピネスチケットなどのアイテムを用いて、自己肯定感を高め、自ら主体的に行動できる個人を育てる。	○自己中心的な行動や発言が見られ、集団としての成熟度は低い。他者の考え方や価値観を尊重しながら、行動ができるようになる。 ○自己肯定感の低い生徒が多く、自信の無さが行動の消極性につながっている。クラス活動や学校行事で、率先して行動できる生徒の割合が前年度より増加する。	○年次進路指導係を中心に、スーパー進学グループ(SSG)を結成し、進学のみならず、ボランティア活動に取り組むなど、2年次集団の核となる生徒の育成を図っている。 ○部活動や課題への取組など、プラス評価できることについては、年次集会など全体で称揚する機会を設けた。	B	○他者と協働できると感じている生徒は41%である。他者を思いやることができる生徒は42%であり、助け合い、学び合う集団としては十分ではないことが窺える。 ○集団で主体的に行動できる生徒も10%程度である。今後も進路に意識を向けながら、個を育てつつ、集団としての熟成を目指したい。	B	
3年次	○LHR 指導案を共有する。 ○専門委員会や生徒会と連携し、場面に合わせて生徒のリーダーを作る。 ○活動において、めあてとふりかえりを設定する。	○リーダーとなる生徒が少ない。主体性が乏しく、教員主導でHR 活動を進めて行かざるをえない。年次団教員が、HR や集会を生徒主導で進行できるよう計画、実行できる。	○年次 LHR(3回分)の指導案を年次会で共有した。 4月-LHRでクラス目標設定、新クラス仲間づくりを評議員が中心となって進化した。 5月-体育大会に向けての団結集会、大会の目的確認を体育委員・評議員中心に企画・進化した。 6月-主権者教育 LHR 選挙管理委員・評議員を中心に準備し、演説・模擬投票を行った。 いずれの活動でも各自目標の設定と振り返りを行った。	B	○専門委員会を中心に生徒主導で学校行事の事前、事後の活動やLHRなどの特別活動を行うことができた。 9月・・臥龍祭LHR(文化委員・評議員) 10月・・社会貢献活動(環境整備委員) 11月・・いじめ防止LHR(評議員・生活委員) 12月・・卒研・ルネス発表会(卒研係) 最後のLHRの活動を通して、生徒自身が協力することの大切さや難しさを感じていた。	A		
③ 新たな大学入試に対する指導体制教科指導の強化	進路指導課	○生徒の主体的な活動をポートフォリオとして記録するために、進路ノートとナビジョンを活用する。 ○授業改革に関する研修会を実施する。	○進路ノートを使って、生徒が1年間の活動を振り返ることができる。 ○学校自己評価アンケート「授業工夫」の項目において、生徒の肯定的回答が前年度より増加している。	○定期考査後、授業1時間を使って「学期リフレクション」を各クラスで実施した。 ○「高校生のための学びの基礎診断(1回目)」の後、教科ごとの分析会を行い、2回目に向けての指導の方向性を共有した。	B	○各学年で「学期リフレクション」を行い、各学期の自らの学習・生活について振り返った。 ○「学びの基礎診断」実施後の分析会を通じて、全体で情報を共有して授業に反映させるように試みたが、「授業の工夫」における生徒の肯定的回答は昨年度より減少した。中途からの試行が生徒に十分届かなかった。	B	B
④ 可能性を引き出す生徒育成	生徒育成課	○生徒に活躍の場や役割を与える。 ○複数の委員会が連携し、企画、広報を行うって、委員会の活動の活性化を行う。	○自分のできることを行い、チャレンジしようとする意欲が低い。こうなってほしい、という思いをもち、協働しながら達成できるかどうかを語る。	○評議委員会を中心に各月の目標を決めたり行事の企画運営を行ったりしている場面がみられた。 ○生活委員や交通安全員と連携する場面もあったが、もっと目に見えるかたちにしていきたい。	B	○各委員会が工夫を凝らしてPRを行ったり、クラスの目標を決め、協力して活動する場面が多く見られた。 しかし、自分の考えを授業や行事で発表できるとする回答は46%に止まり、チャレンジに後押しが必要である。	B	B
	研修部門	○ポジティブ行動支援に関する研修会を実施するとともに、ハピネスチケットの利活用に関する意欲的な取り組みを教員間で共有する。	○ポジティブ行動支援研修会を実施する。 ○ハピネスチケットの利活用に関する情報を収集し、教員通信等において教員間で内容を共有する。	○ポジティブ行動支援研修会は新任者オリエンテーションと兼ねて4/2に実施した。 ○7月に1学期の取組についてアンケートを実施し、結果を8月の職員会議で共有した。	B	○ポジティブ行動支援に関する取組は、1学期・2学期に行った生徒育成課表彰の取組に発展した。 ○2年目となるハピネスチケットは、年間で約600枚発行した。活用頻度はますますで、徐々に定着しつつある。	B	

学校経営目標	担当	具体的計画	現状及び今年度の達成基準	中間達成状況	評価	最終達成状況	評価	総合
⑤ 人権教育・道徳教育の強化と主権者教育の充実	教務課(人権教育)(道徳教育)	○年間5回以上、電子掲示板において人権、道徳に関する啓発メッセージを送る。 ○人権教育、道徳教育に関する職員研修会を行う。	○人権教育、道徳教育に関する考え方について現在職員に浸透していない部分があり、担当者の積極的な研修会への参加ならびに職員への伝達講習会の機会を設ける。	○人権教育推進計画について教員研修会を実施し、ハンセン病を事例にしながら「教育の中立性」について確認した。 ○電子掲示板については、9月から掲載予定である。 ○道徳教育の伝達講習会を計画中である。	B	○アンケートにおける生徒の自己評価が、最も高くなっており、一定の成果があった。生徒の感想では、「ハンセン病の断種政策は科学的な根拠がない」など、客観的な考察もできている。 ○電子掲示板に代わり、人権に関する生徒向け通信を、人権週間に発行した。 ○道徳教育の職員伝達講習会はできなかった。	B	B
	主権者教育担当	○主権者教育委員会を開催し、各教科において主権者教育の観点に立った授業を行うよう勤める。 ○教科、LHR における啓発し、岡山市主権者教育サポーターへの参加を呼びかけ時事問題、選挙への関心を高める。	○主権者教育委員会の開催が去年は出来ず、教科での取り組みが共有できなかったので3回の開催を目標とする。 ○政治問題の関心が著しく低く、本校の有権者の投票率は10%台だった。アンケートで、投票率、「政治に関心がある」の項目で50%以上にする。	○3年生主権者教育 LHR を行い、参議院選挙に向けて模擬投票を行い、啓発した。2学期アンケートを実施予定である。 ○主権者教育委員会の開催はできなかったが、職員会議で主権者教育の観点に立った授業の実施を高める呼びかけを計画中である。	B	○1、3年のLHRで主権者教育を行うことができた。 ○全学年で、政治意識についてのアンケートを実施したが、日常から政治に関心を持っている生徒は、50%未満だった。もっと高める必要がある。 ○主権者教育委員会の開催はできなかった。 ○教科ごとが実践する主権者教育の観点を踏まえた授業は、それぞれが計画、実践ができた。	B	
⑥ ユニバーサルデザイン型授業の充実	教務課	○授業およびSHRでの視覚支援の充実 ○効果的な視覚支援の例について教員間に発信する。	○視覚支援機器の使用頻度について「授業の1/2以上の機会で使用している」教員の割合を60%→70%とする。 ○授業の目標や流れを示したり、視聴覚機器を活用したりしていると実感する生徒が60%→75%とする。	○「授業の1/2以上の機会で使用している」教員の割合 座学 88% 実技・実習 61% SHR 33% 座学実習合わせて79%で使用頻度は向上、効果的な視覚支援のノウハウの広がりが次の目標となる。 ○視聴覚機器を活用していると実感している生徒の割合は集計中	B	○授業等視聴覚機器は不可欠なものとなり、教員の使用は完全に定着し、授業改革として十分活用されている。 ○一方で、生徒が活用できる視聴覚機器が十分ではなく、「自分たちの利用しやすい学習環境が整っているか」の質問では、肯定が56%に止まっている。	B	B
⑦ 「ルネス学」の拡大展開と効果的な実践	探究学習検討委員会	○3年次ルネス学担当者が金川病院とのイベント開催の向け、連絡を密にとる。 ○2年次ルネス学担当者打合せ会を時程内で計画的に開催する。 ○フィールドワークが実施できるよう地域関係団体と折衝する。	○3年次ルネス学の活動に協力していただいた方々を招き成果発表会が開催できる。 ○2年次生全グループが講演やフィールドワークを通して研究テーマを決定できる。	○3年次:ルネストランを開催できた。『ルネストランその後』の取組を含め、12月に校内発表会を行う。 ○2年次:校内課題をテーマに探究方法の学習が予定通り進んだ。10月にポスターセッション発表会を行った後、11月から地域課題に移行する。	B	○卒業研究とルネス学合同で発表会を開催することができた。ルネストランの活動は、数々の賞を受賞した。 ○2年次ルネス学では、活動後半のまとめとして、学校課題をテーマにポスターセッションを行った。小グループでのフィールドワークにも出かけ、学習してきたことをカテゴリー内で発表し、情報を共有した。	B	B
⑧ 仲間と協働する場面の拡大	1年次	○生徒主体のグループ活動を多く設定 ○主体的に活動できるよう、支援や言葉かけを行ない、活動できたときには称賛することで協働に対する意識を育てる。	○積極的に役割に取り組もうとする生徒が多い。 ○集団やクラス、グループでの活動に、相談しながら取り組むことができる。	○4月のレクリエーション大会や体育大会の準備、SST などクラスやグループを意識して活動できつつある。コミュニケーションが苦手な生徒も多いので、クラスやグループで活動する場面を設定していきたい。	B	○職場・上級学校訪問では、事前、事後の指導を含め、グループ活動を行なった。SSTは年間5回実施した。 ○仲間やグループを意識して行動できる場面が少しずつではあるが、増えてきている。	B	B
	2年次	○ルネス学や修学旅行の班別自主学習において、自分の考えを伝えつつ、他者の考えも取り入れながら計画・活動できるように支援する。	○仲間と協働しながら、様々な活動に取り組むことができる。	○ルネス学では、学校課題発見解決学習において、4カテゴリーに分かれ、グループ活動に取り組んだ。ポスターセッションに向けた準備において、それぞれの役割を果たしている。	B	○修学旅行では十分な取組ができなかった。 ○ルネス学では、フィールドワークを実施し、事前計画と事後発表をそれぞれのグループ内で役割分担をしながら実施し、概ね良好な成果を得られた。	B	
	3年次	○地域の清掃活動を年次で行う。 ○HR 活動、ルネス学、卒業研究の授業で、自分の考えを相手に伝えるコミュニケーション活動を取り入れる。	○年次で地域へ出て活動する場面がほとんどない。 ○生徒が活動の目的を理解し、仲間とコミュニケーションをとりながら取り組むことができる。	○年次のLHRでは、毎回グループ活動を取り入れ、協働する機会を増やした。活動の目的や意義を全員で確認し、積極的に行動できたか各自で振り返る場面も設定した。 ルネス学ではルネストランのプロジェクトを実行し、卒業研究では全員が各グループで中間発表を行った。	B	○社会貢献活動として地域の清掃活動を行った。環境整備委員が中心となり、2週間前からクラスでの事前準備、活動前の年次集会を企画、運営した。 ○年間を通して発表や話し合う場面を多く設定し、仲間とコミュニケーションを取りながら協働することができた。	A	
⑨ 魅力ある学校づくりに向けた研究 『学校の未来を創る』	学校活性化委員会	○随時、委員会を開催し、本校の現状分析と将来のあるべき姿・魅力ある学校づくりに向けた研究を行い、活力ある学校づくりを推進する。	○7月下旬までに、新しい学科の方向性を確認し、カリキュラムの原案を検討する。 ○12月下旬までに、研究をまとめ、教育課程の原案を作成する。(中間まとめ) ○1月下旬までに、公表の準備をし、想定 Q&A を作成する。 ○3月下旬までに、公表前後の対応を行い、学校案内等を作成する。	○5月に学校改革アンケートを実施し、地域における「中学生の声」「小・中学生の保護者の声」を集約し、分析・整理した。 ○8月末までに委員会を16回開催し、広く情報を集めながら、新しい学科の方向性について研究協議を進めている。 ○9月下旬の「地域とともに創る高等学校のあり方を考える会」開催に向けて準備を進めている。	B	○地域と連携した体験的な活動を通して、自らのキャリアを考察するとともに、次代を生き抜く力を養う教育内容を展開させ、地域創生・活性に寄与する人材を育成する学校づくりを推進している。令和3年度入学生から、学校の方針が中学生により明確に伝わるよう、学科名を「キャリアデザイン科」とすることになった。今後、魅力ある学校づくりに向け研究を継続するとともに、中学生や保護者、地域へ向けた広報活動を充実させる。	B	B
	総務課	○オープンスクールや学校説明会、中学校訪問等について企画の検討を繰り返し、より生徒募集につながる内容となるようにする。 ○ホームページにおいて、更新作業をタイミングよく行い、本校の魅力を十分に伝えられるよう充実させる。	○志願者が7年連続で募集定員を下回り、2次募集を実施している。昨年度、過去最低の入学者人数であった。 ○オープンスクール、学校説明会の参加者数が前年を上回っている。 ○特別入試志願者数の増加をめざす。(目標値:110名以上(前年100名以下))	○中学校訪問による広報に加え、ネット受付等新たな取組を行ったが、夏季オープンスクール参加者は、昨年を上回ることができなかった。 秋季オープンスクールの参加者を増やせるよう準備を進めている。 ○ブログ等の更新は、早いタイミングで更新できている。 ○今後、志願者数増加に向けての取組をしっかりと行っていきたい。	C	○中学校訪問による広報、オープンスクールや学校説明会の内容を充実、ホームページの素早い更新を行う等、生徒募集につながるよう取り組みを行ってきたが、結果として目標を達成することができなかった。 ○特に特別入試志願者は過去最低で、定員の80名を下回ることとなり、非常に危機感を感じている。さらなる改革や取り組みが急務である。	C	